



『ぼうぼうあたま』に描かれた ADHD

● 『ぼうぼうあたま』
「ぼうぼうあたま」はドイツの医師であるハインリッヒ・ホフマンがわが子のために1884年に作成した自筆の絵本で、その後世界各国で翻訳され広く読まれている。

齊藤 最初に、少し遊んでみましょうか。『ぼうぼうあたま』*¹⁾ という絵本をご存知ですか。この『ぼうぼうあたま』は19世紀の絵本で、具体的にわかりやすく描かれた ADHD 像の出発点の一つとされていますが、特にその中の「行儀の悪いフィリップ (Die Geschichte vom Zappel-Philipp)」という物語が、ADHD の子どもを典型的に表した物語だと言われています。

zappel という形容詞は「そわそわした」という意味ですから、多動な落ち着きがなく衝動性の高い子どもの様子を表しているのでしょう。この物語のほかに、「おそらのすきなハンスくん」という、空を眺めるのに夢中になって歩いていて川に落ちるハンスくんの物語もあります。このお話は不注意さの一方で、彼らが持っていることもある過集中の傾向を表しているように思います。これも ADHD 児によく見られる現象の一つですね。たとえば、黒柳徹子さんの『窓ぎわのトットちゃん』の中に、登校途中で草花などに目を向けているうちに夢中になって、学校へ行くのを忘れてしまったといったエピソードが描かれています。これもやはりある種の ADHD の状態像を表していると思うのです。

そういう視点で『ぼうぼうあたま』を見てみると、虫の羽をむしり、鳥を撃ち殺し、猫をいじめ、いたずらばかりするフリードリッヒが、大きな犬を鞭でいじめて反撃されるという「わんぱくフリード (Die Geschichte vom bösen Friederich)」という物語もその衝動性の高さから ADHD が疑われます。bösen という形容詞は「わんぱく」というより「悪い」とか「意地悪い」という意味ですから、このお話のフリードリッヒの行動を“意地悪さ”と受け止められること自体、ADHD 児が悪い子どもと誤解されやすい現状にも通じ

る物語という印象を持ちますね。実はフリードリッヒも決してそんなに意地悪な気持ちでやっているわけではないのではと思います。思いついたらパッとやってしまい、イヌにかまれてけがをしてやると反省するという ADHD の子どもの物語と受け取ると納得できるように思います。

「ぼうぼうあたま」というのはある意味 ADHD のケース集のような、ADHD の複数の特徴をとらえた物語という観点で読み直してみるとおもしろいですね。ちなみに、「ぼうぼうあたま」と訳されているタイトルの原題は Der Struwwelpeter ですがこの「Struwwel」という単語の意味は「めんどくさがり屋」ですので、そのまま日本語に置き換えれば「めんどくさがり屋のペーター」、日本の説話の「ものぐさ太郎」と同じ意味ではないでしょうか。

『ぼうぼうあたま』は今も世界中で結構読まれているようですが、それはやはりその内容が物語として優れていることと、ADHD 特性を強調して描かれた子どもたちがどこか憎めない、ある種の面白味を持っていることに拠るのではないかと私は思っています。この絵本を読んでいると、ADHD の弱点と長所（強み）がいろいろ見えてきておもしろいなと思い、冒頭にこの絵本の話をしらせてもらいました。

絵本のような文学作品ではなく学術論文として ADHD の特性に触れたものが世に現れるのはとりあえずイギリスの Lancet 誌に載った 1900 年頃の論文とすべきでしょうか。

宮島 1902 年の Still 博士の論文ですね。



ADHD の歴史

● Still の論文

この発言後に参加した日本 ADHD 学会第 10 回総会で聖マリアナ医科大学神経精神科学教室特任教授の小野和哉先生の会長講演を聞く機会を得た。小野先生は 1775 年にドイツ人医師 Melchior Adam Weikard が著した「Der Philosophische Arzt」が ADHD の症候を記載した最も早い書物であると指摘されていた。

● 三年寝太郎

日本の民話の一つ。3 年間寝続けていた寝太郎が突然起き出して巨石を動かし、川をせき止め、干上がった田畑を治水した。傍から見れば怠惰な様で衝動的なように見える。

● 東海道中膝栗毛

十返舎一九により 1802 ~1814 年に初刷りされた。弥次郎兵衛と喜多八が道中さまざまな騒動を起こす。

齊藤 1902 年の Still の論文^{*2)} が、初めて世に出た ADHD の学術論文と言われています。この論文に出てくる子はみな、反社会的な子どもばかりで、衝動性が高い例や、二次障害、特に反社会性が加わっているような例が取り上げられています。つまり、この論文が出た 20 世紀の黎明期には医師や社会がそのような子どもに手を焼いていた、という背景が見えてくるのです。

このように、歴史の振り返りから現在の ADHD 概念につながってくるエピソードが見つかることがあると思うのですが、先生方がいかがでしょうか。

宮島 私が講演をするときには、落語の「三年寝太郎」*や「東海道中膝栗毛」*の弥次さん喜多さんの話をします。昔から語り継がれ、人に興味を持たせるようなお話の中には衝動性をもった登場人物が出てくるのがよくありますね。齊藤先生があげてくださった『ぼうぼうあたま』のような絵本や童話、落語では、ADHD 様の症状に微笑ましさといったものを感じさせる内容になっています。けれども、われわれの生きている実際の環境では、それらの症状がその人の「生きづらさ」として現れるようになっています。

症状がその人の「生きづらさ」として現れたり、周囲が大変な思いをしたりするようになってくるにつれ、衝動性や多動性を持った人たちを 1 つの群と考えるようになったことが、ADHD の概念の確立につながってきたのではないのでしょうか。

このような概念が確立したことによって、「多動・衝動性」といった症状に気づきやすくなり、そして現代では昔より早期に気づくことができるようになってしまっているからこそ、早期に介入する必要性が叫ばれ、ADHD がクローズアップされているのだと思います。

ます。

齊藤 現在の ADHD 概念につながるお話ですね。

ADHD の歴史を語るうえで、微細脳障害あるいは微細脳機能障害 (MBD: minimal brain dysfunction)* という概念は避けて通れませんね。この概念は小児科の先生たちが中心になって推奨してきて、われわれ児童精神科医もそれに従ってのちに ADHD と呼ばれることになる子どもたちを MBD と診断したわけです。この MBD 概念について、ぜひ宮島先生のご意見を伺いたいのですが。

宮島 MBD という概念は、MRI などの画像診断がない時代に大きく取り上げられたものですが、私にとってはとてもしっかりきた概念でした。というのも、多動や衝動性といった症状が微細脳機能の問題によって起きているのであれば、われわれ医療者が介入することで治せる部分が出てくるかもしれないと思えたからです。

あとで取り上げられる自閉スペクトラム症 (ASD) との併存の問題 (第 1 章-7 参照) についても、MBD という概念のほうが、ある意味では大きくとらえることができるのではないかと考えています。Minimal brain dysfunction という大きな枠の中に ADHD や ASD が入っているのではないかというのが私なりのイメージです。その枠の中では、症状がグラデーションのようになっていて、ところどころ重なっている部分もあるという考えです。そして今、概念がある程度明確になってきたことで、その重なりが併存問題として議論になっているのではないかと思います。それはのちの議論に置いておきましょう。

ですから、ある意味で MBD は、今の診断と重ねて考えてみると、広く神経発達症群*を示していたという気がしますね。

齊藤 そんな議論も踏まえて、飯田先生いかがでしょうか。

飯田 齊藤先生に絵本を見せていただいて思ったのですけれども、やはり ADHD の子にはかわいいところがありますよね。たとえば『ドラえもん』ののび太君のような、何かちょっとおもしろい、捨て置けない雰囲気といえますか。そういった何となく惹かれる雰囲気やかわいいところがたくさんあるから、そんなに悲観的にならず

● MBD

知能はほぼ正常であり、明らかな脳損傷の証拠がないにもかかわらず、行動あるいは学習面でさまざまな症状を呈する。

● 神経発達症群

従来用いられていた発達障害の概念が、2013 年に改訂された DSM-5 において神経発達症群として総括され、そこには知的能力症、限局性学習症、コミュニケーション障害、自閉スペクトラム症、注意欠如多動症、運動症群が含まれている。

にみんなで付き合っていこうよ、という思いはいつも持っています。

私が医者になった1980年代ころはまだMBDのほうが優勢でした。ADHDやASDなどはあまり聞きませんでしたね。発達障害について学んでいく中で、自閉症などはわけがわからないといった感覚を持ちましたが、MBDは医学的な視点や脳の側面からとらえている説明もあったので、医学的にとらえられるかもしれないという雰囲気を感じました。

ただ、いざ実際にMBDに取り組んでみると、宮島先生が「神経発達症」とおっしゃるとおり、本当にいろいろな症状がありました。そういうのを見ていると、われわれはその中の何を抽出して、何をどう変えたらいいのだろうかという、呆然としてしまうようなところがあったのです。

● DSM-III/-IV/-5
Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disordersの略、米国精神医学会が作成した精神疾患の診断基準であり、現在は世界的に広く利用されている。1980年にDSM-IIIが発表されてから世界的に普及され、1994年にDSM-IV、2013年にDSM-5と改訂されている。

そういった状況にDSM-III*が登場します。ここで明確に学習の問題と行動の問題で分かれました。私としてはこれでより扱いやすくなったような感じがしました。

ですから、ADHD概念の歴史はMBDから始まりますが、そのMBDのものすごくごちゃごちゃとした概念が少しずつ整理されていって、何となく医学的に扱いやすい概念になっていったと思います。

ただ、もちろん、脳の障害の詳しい部位などといったことがわかっていないからということもありますが、それでも私としては、学習の問題と行動の問題に分かれていった経緯、経過に明確になっていないところがたくさんあったと思います。

宮島先生がおっしゃったように、ひょっとしたら曖昧にMBDが1つのものかもしれないというところもありますから、MBDから流れてきた今のADHDの概念が、このまま続くような感じもしないですね。まだまだ変わっていく気がします。

齊藤 お二人の話をお聞きして改めて感じるのは、DSM-IIIの登場というのは概念上の大きな曲がり角を作っていて、MBDはDSM-III登場以前の伝統的な疾患概念なのだということです。伝統的というのはもう古いという意味ではなくて、「病因があって、症候があ